

# 自閉症スペクトラム幼児に対する家庭支援（1）

“柔軟性をもった”家庭支援プログラムの開発と効果についての検討

○伊藤 志穂

深松 綾花

小野里 美帆

（埼玉県立越谷西特別支援学校）

（文教大学教育学部）

KEY WORDS: 自閉症スペクトラム障害 家庭支援プログラム 母親の変容

**I. はじめに** 生涯発達を考慮すると、自閉症スペクトラム障害（「ASD」）児においては、早期からのコミュニケーションを中心とした支援及び保護者に対する支援が欠かせない（清水ら、2003）。ASD 児への早期介入においては、専門家が子どもを直接支援する方法のみでは、獲得したスキルの般化・維持が困難であり（藤原ら、1982）、また、子どもが直接指導を受ける機会がないまま保護者が学んだ知識を家庭に持ち帰るだけでは、適切な方法での定着に課題があることが指摘されている（寺西ら、2009）。これらのデメリットを最小限にするため、子どもと保護者双方に支援可能な家庭中心型指導について検討していく必要がある。その際、保護者が子どもとの関わり方について日常生活文脈の中で体得すること、療育技法を一律に適用するのではなく、家族や子どもの状況に柔軟に合わせられるオーダーメイドによる継続的な支援が重要である。本研究では、対象児と対象児の母親に対する指導プログラムを開発し、適用した経過を報告する。

**II. 方法** **1. プログラムの概要** **1) 支援形態**: 月2回の家庭訪問。1回の支援時間は1時間弱。支援の流れは、発達アセスメント→指導目標の立案→指導プログラムの作成（定期的に見直し）→支援（指導者による子どもへの指導+家庭課題の提示+保護者のカウンセリング）。**2) 子どもとの関わり方についての教示**: プログラムの趣旨と方法を説明し、理解と同意を得たうえで実施する。**(1) 子どもの状態についての認識**: アセスメント結果を基に、子どもの状態及びニーズについて話し合いを行い、指導者と共通認識が得られるよう留意する。共通認識を得るために、毎回の支援終了後に、支援内容について保護者と話し合う機会をもつ。**(2) 支援目標及び方法の理解**: 家庭課題の目標と方法について、母親が趣旨を理解できるよう、十分な説明と支援方法についてのモデル提示を行う。モデル提示については、保護者が、指導者による支援を観察することを通して、子どもへの関わり方について理解するよう促すと共に、必要に応じてビデオによるフィードバックを行う。プログラムの一部では、保護者も指導者と共に支援場面への参加を依頼する。保護者の子どもへの関わり方については、子どもの発話・行為水準により大人の働き方を変化させる足場作り（プロンプト）の習得を最終目標とするが、保護者の認識や技術、子どもの状態に応じて、保護者に求める目標を調整する。**(3) 家庭課題の提示と記録**: 家庭課題は、家族の状況を考慮し、1回につき1-2つ、保護者と相談しながら決定し、A4:1枚の所定の用紙に記載して提示。保護者は、当該用紙に家庭課題の実施状況を記録。指導者は、次の指導時に、家庭課題の記録と面談を基に、実施状況について分析を行い、子どもと保護者の状況を理解すると共に、家庭課題提示の参考とする。家庭課題記録を基にした面談の際には、保護者の努力を認めるようにする。**(4) カウンセリング**: 家族の生活、保護者の精神面に対するサポートとして30分程度の面談を実施。カウンセリングの際には、事前にA4の所定用紙を渡し、生活状況、悩み等について記載を依頼した。

**2. 適用** **1) 対象児（A児）**: 支援開始時4:03の男児。ASD及び知的障害と診断を受ける。新版K式発達検査2001では、姿勢-運動75（3:01）、認知-適応54（2:03）、言語-社

会26（1:01）、全領域46（1:11）。身体接触を嫌がる様子はない。指さしは時折生起するが、語彙の表出はほとんど認められなかった。3:07より、「B学園」に入所し、週5日通園。**2) 家族及び母親**: 家族構成は、父、母、本児、兄（8歳）、妹（2歳）の5名。母親はフルタイムの仕事に従事。A児の療育について父親とよく話し合い、強い関心がある。ASDについて基礎的な知識はあり、一定の障害受容はできている。「ことばが出るとは思えない」と、ことばの遅れについて強い不安を持つものの、具体的な関わり方について知識がなく、悩んでいた。A児に対しては、受容的に関わり、行動の強要は少なく、A児のペースに合わせて関わるが、A児の反応を待たず、声かけや行為を先回りして行い、長文で話す傾向があった。母親とA児との関係は良好であり、父親も育児に協力的であった。**3) 支援目標**: ①母親がA児とコミュニケーションを取る際の関わり方の習得、②日常生活で無理なくできることばの支援方法についての体得。**4) 支援手続き**: 10カ月、計17回。支援及び家庭課題提示については、SVによる助言を受けた。**5) 分析方法**: VTR録画や記録用紙を用いた。母親が記述した記録用紙を基に、家庭課題実施状況の変化（①実施場面数 ②登場人物数）、母親の変化（記載されたエピソード、A児との玩具遊びの変化）から検討した。期間を初期（S1-6）、中期（S7-11）、後期（S12-17）に分けて分析した。

**III. 結果及び考察** 母親による、課題実施場面数及び課題の一環として子どもと関わった人の人数は、指導初期から後期にかけて漸次的に増加した。実施場面は、家から通園、公園、外出先へ、対象者も、家族や友達、地域の人へという広がりがありそれぞれ認められた。母親による記録の中で、A児に関するポジティブなエピソードが中期・後期に増加した。母親の行動の変化として、初期はA児の反応を待たず、A児と母親が並行的に遊ぶことが多くみられたが、後期には母親がA児の行為を注視しながら代弁し、適宜、操作を援助する様子が認められた。A児が母親の顔を確認し、動きを模倣しようとする様子も見られ、母親とA児の相互交渉が成立するようになった。これらの母親における変化は、母親が子どもと日常的に相互交渉機会をもったこと、関わり方への自信を持ち、関わりへの意欲が増したことが推察される。これらの結果は、本プログラムの一定の妥当性を示すものと言える。

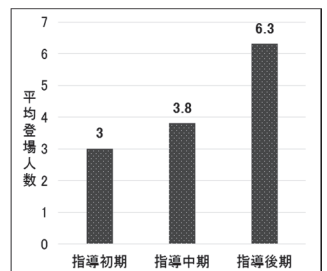
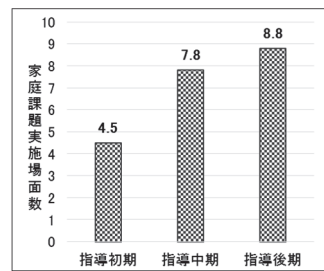


Fig. 1 実施場面数の変化

Fig. 2 家庭課題実施場面数の変化